KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

言語学者藤岡勝二の音声中心主義思想とその淵源について：アルタイ諸語研究とローマ字化国語国字運動を通して

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2023-03-24 キーワード (Ja): 藤岡勝二, 音声中心主義思想, アルタイ諸語研究, ローマ字化国語国字運動, 羅馬字手引 キーワード (En): 作成者: 柿木, 重宜 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00008075

関西外国語大学 研究論集 第117号（2023年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.117（March 2023）

言語学者藤岡勝二の音声中心主義思想とその淵源について

── アルタイ諸語研究とローマ字化国語国字運動を通して ──

柿　木　重　宜

要　旨

本稿では、稀代の言語学者藤岡勝二の音声中心主義思想とその淵源を、彼のアルタイ諸語研究とローマ字化国語国字運動を通して考察した。藤岡が逝去した後、膨大な資料のアルタイ諸語文献の翻訳が残されたが、藤岡は、その資料を、ローマ字転写（transcription）をした後、翻訳をしていた。類まれな語学の才を有した藤岡でさえも、縦文字のアルタイ諸語文献を、ローマ字化しなければ理解できなかった。また、藤岡は、若き頃、言語学者ガーベレンツの多大なる思想的影響をうけているが、ガーベレンツはアルタイ学にも精通しており、彼との邂逅によって、アルタイ諸語研究とローマ字化国語国字運動の接点を見出すことができる。さらに、本稿では『羅馬字手引』の言語特徴を詳細に検討した。「ローマ字ひろめ會」の標準テキストでありながら、数多の口語体の表現が収録されており、藤岡の音声中心主義思想の原点が、このテキストでも見られるのである。

キーワード：藤岡勝二、音声中心主義思想、アルタイ諸語研究、ローマ字化国語国字運動、羅馬字手引

１．はじめに

本稿の目的は、言語学者藤岡勝二（1872-1935）の音声中心主義思想とその淵源を、彼のアルタイ諸語研究とローマ字化国語国字運動の足跡を辿ることによって明らかにすることにある。筆者は、平成14（2002）年５月に、国語学会（現日本語学会）において、「藤岡勝二の言語観―系統論と国語国字問題をめぐって―」という題目で研究発表をする際に、藤岡のアルタイ諸語研究とローマ字化国語国字運動の関係性について調査するため、様々な資料を駆使しながら、両者の研究テーマの接点について考察したことがあった。藤岡が、近代の「国語」と「言語学」の確立に深く関わっていたことは知っていたが、上記の研究発表が契機となり、爾来、藤岡研究に本格的に取り組むことになった。藤岡勝二の研究対象は多岐にわたり、日本語系統論、アルタイ諸語の文献学的研究、サンスクリット学、辞書学があり、とりわけ、ローマ字化国語国字運動においては、理論面だけではなく、実践面も支えたのである。まさに、多彩な研究テーマを有した、稀有の言語学者であったといえる。

その後も、現代言語学界では「忘れさられた言語学者」とみなされていた藤岡勝二の研究に関わる調査を続け、平成25（2013）年に、学位論文に加筆、修正を施した『近代「国語」の成立における藤岡勝二の果した役割について』を刊行した。さらに、近代言語学史における藤岡勝二の位置づけを明確にするために、『日本における近代「言語学」成立事情Ⅰ』（ナカニシヤ出版、2017b）を出版した。拙著によって、藤岡勝二という名は、日本語系統論だけではなく、様々な分野で取り上げられることもあったが、未だ藤岡勝二の言語思想の全貌を明らかにできたわけではない。

こうした状況の中、本稿では、特に、言語学者藤岡勝二の「音声中心主義」に焦点をあて、彼の言語思想の根底にある音声中心主義思想とその淵源に注目して、考察を試みた。勿論、膨大な資料の全貌を紐解くことはできなかったが、多彩な研究テーマを有した藤岡の言語思想を支えた原点といえる音声中心主義を通して、稀代の言語学者藤岡勝二の実像を少しでも明らかにしたいと考えている。拙著（2013）以外にも、筆者は、これまで藤岡勝二に関わる多数の拙稿を執筆してきたが、現代言語学界においても、彼の真の研究業績が充分に理解されているとは言い難い。唯一つ「ウラル・アルタイ語族説」という日本語系統論説だけが知られているが、この学説さえも、誤謬している言語学者が少なくない。

本稿では、言語学者藤岡勝二の音声重視の言語思想を、アルタイ諸語、ローマ字化国語国字運動の文献を通して明確にし、彼の言語思想の淵源を同時に考察したい。

２．藤岡勝二の言語思想とアルタイ諸語について

2.1　藤岡勝二のアルタイ諸語の研究

藤岡勝二の音声中心主義の言語思想はいつ生まれたのであろうか。拙著（2013）においても、藤岡が音声中心主義思想を有していたことを指摘したが、音声中心主義に関わる業績やその淵源については十分に解明できなかった。また、彼に影響を与えた言語学者には、どのような人物がいたのか、この点についても、彼が残した論考の言説を参考にしながら、考察していきたい。藤岡勝二の『言語學雑誌』の論説（1900-1902）や『國語研究法』（三省堂書店、1907）、アルタイ諸語研究、ローマ字化国語国字運動の理論と実践研究を概観すると、彼の思想の根底には、常に音声中心主義思想が存在していたことを窺うことができる。本節では、まず、藤岡勝二のアルタイ諸語の研究から、検討していきたい。

昭和10（1935）年に、藤岡が逝去した後、生前に膨大なアルタイ諸語文献のローマ字転写とその訳文が残存していたことが分かった。おそらく、藤岡が完璧な翻訳を追究したが故に、生前に刊行をしなかったと考えられる。しかしながら、後年、藤岡の東京帝国大学文科大学言語学科教授の後任となった朝鮮語学者の小倉進平（1882-1944）と直弟子のアルタイ学者服部四郎（1908-1995）の尽力があり、『満文老檔』（岩波書店、1939）、『喀喇沁本蒙古源流：

羅馬字轉寫日本語對訳』（文求堂書店、1940）が刊行される。ただし、藤岡本人が刊行したわけではないため、疑問を呈する箇所も少なからずみられる。例えば、『喀喇沁本蒙古源流：羅馬字轉寫日本語對訳（Erdeni-yin tobči）「宝玉の史綱」』は、モンゴル三大文学『元朝秘史（Mongγol-un niγuča tobčiyan）「モンゴルの秘めたる歴史」』、『アルタン・トブチ（Altan tobči）「黄金史綱」』と並び称される仏教的色彩の濃いモンゴル年代記であるが、本文には、『蒙古源流』の原文以外の箇所も記されている。この点については、拙著（2017b）で取り上げたので、ここでは割愛して、拙著を参考にしてもらうことにしたい。本節の重要な事項は、藤岡のアルタイ諸語の文献研究とローマ字化国語国字運動の接点はどこにあるのかという点である。

筆者は、第１章で述べたように、国語学会（現日本語学会）春季大会において、アルタイ諸語の研究と後年、なぜ藤岡がローマ字化国語国字運動の精神的支柱として、ローマ字教育の理論の構築と実践運動に尽瘁したのかという課題について検討した。

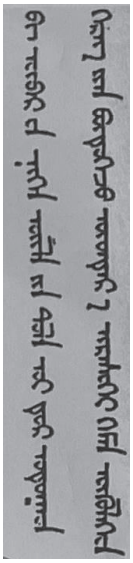
本節では、まず、アルタイ諸語文献の文字と音声の言語特徴について考察したい。例えば、モンゴル語の縦文字（ウイグル式モンゴル文字）では、歯茎閉鎖音の無声音と有声音（t と d）、軟口蓋閉鎖音の無声音と有声音（k と g）さえも区別できない。単語のローマ字転写を覚えなければ、音価の差異も認識できないのである。藤岡は膨大なアルタイ諸語の文献研究を翻訳したが、刊行されたのは、その一部に過ぎない。しかも、縦文字から翻訳するのではなく、ローマ字転写をした後、緻密な翻訳を試みていたのである。以下の例は、拙著（2018：116）から引用した「捨身説話」の文である。この話は、モンゴル仏典の『金光明経（altan-gerel）』に収められているが、モンゴル語文語文献には、仏教関連の文献が数多くみられるのである。

（ローマ字転写）

bi öber-ün nigen üile-yin tula oi-dur oduγad
kereg-iyen bütügejü üdtere iresügei kemen ögüleged

（翻訳）

私は自らの用事のために森にでかけて
自分の用事を済ませ、すぐに戻ってきたいと話して…….



モンゴル語文語文献の文字

藤岡は、この後、明治38（1905）年に、師の上田萬年（1867-1937）から、東京帝国大学文科大学言語学科を継承することになるが、この頃には、かなりアルタイ諸語に精通していたと考えられる。ドイツ留学以前に、彼が最後まで編集人を務めた『言語學雑誌』の「質疑應答」には、ウラル・アルタイ諸語関連の著書を問う箇所がみられる。この事項からも、『言語學雑誌』が創刊された明治33（1900）年までに、藤岡は、岡田正美（1871-1923）、保科孝一（1872-1955）とともに、国語に関する事項取調の嘱託を務めながら、アルタイ諸語の研究も進めていたと考えられる。藤岡は、膨大なアルタイ諸語文献の難解な翻訳を進める前に、ローマ字転写（transcription）に取り組み、ローマ字がいかに便利な文字であるかを痛感したことであろう。この経験が、後の「ローマ字ひろめ會」結成へとつながり、藤岡の音声中心主義思想は揺るぎのないものとなるのである。

上述したように、明治38（1905）年は、藤岡が、正式に当時の言語学界の中心であった東京帝国大学文科大学言語学科を受けついだ重要な時期であった。また、本年に、終生ヘボン式ローマ字表記法の正当性を唱えた藤岡は、自らが考案した「日本式」表記法を支持した田中舘愛橘（1856-1952）と大同団結を果し、「ローマ字ひろめ會」を結成した。ローマ字化国語国字運動において、まさにメルクマールといえる年であった。

2.2　藤岡勝二のアルタイ学とローマ字化国語国字運動との接点

藤岡勝二に影響を与えた言語学者については、すでに、拙著（2013）や他の学会誌に寄稿した論考で詳述しているため、ここでは割愛したい。本節では、藤岡のアルタイ学の研究に影響を与えた言語学者とローマ字化国語国字運動との関連性について考察したい。藤岡の言語思想に影響を与えた著名な言語学者として、ウィリアム・ドワイト・ホイットニー（1827-1894）、ヘンリー・スウィート（1845-1912）ゲオルク・フォン・デア・ガーベレンツ（1840-1893）、ヘルマン・パウル（1846-1921）等を挙げることができる。

藤岡（1907）の『國語研究法』は、そのタイトルから「国語学」の研究を想起させるが、拙稿（2017b：57）でも指摘したように、言語学概論という名が相応しい著書である。青年文法学派の言語理論を導入しながら、言語の本質について追究しており、さらに、ローマ字の有用性まで説いている。ここで、藤岡は、数多の著名な比較言語学者を掲げているが、彼自身が、明治34（1901）年から明治38（1905）年の長きにわたって、ドイツ留学を経験して、ドイツの青年文法学派の最新の言語思想に直にふれたことと大いに関係があるだろう。

特に、明治27（1894）年に、藤岡が最初に寄稿した論考が、辞書学に関わる「辭書編纂法幷日本辭書の沿革」（『帝國文学』所収　第２巻第１号、２号、６号、10号、大日本圖書株式會社）である点に注目したい。上記に掲げた言語学者ホイットニーは、ウェブスター辞典の改訂をしており、藤岡（1907）の言語思想にも、多大なる影響を与えた。藤岡の音声重視の言語思

想は、辞書学の面では、大正８（1919）年に、三省堂より刊行された『ローマ字引實用國語字典』において結実されているといえよう。なお、英語学史の分野で特筆すべき事項として、藤岡は、大正10（1921）年に、大倉書店より『大英和辭典』（上巻）を刊行しており、昭和７（1932）年に『大英和辭典』（第１巻、第２巻）を完成していることであろう。

また、藤岡勝二の音声重視の思想については、上掲の英和辞典において、井田（1996：13）が次のようなことを考察している。国際音声記号（IPA）を初めて採用した可能性があることを示唆しているのである。

……、本稿の目的は、上記の藤岡勝二著『大英和辞典』*A Complete English-Japanese Dictionary* 第１巻こそ、国際音声記号（International Phonetic Alphabet, IPA）を採用した本邦最初の英和辞典である事実を確認することにある。

また、井田（1996：15）は、藤岡のアルタイ諸語文献（満州語、モンゴル語、トルコ語）の資料について記しているが、藤岡の音声中心主義思想とアルタイ諸語との関係性については論じていない。『言語學雑誌』の藤岡の論考を掲げてはいるが、ローマ字化国語国字運動に関わる論考についてはふれていない。藤岡の音声重視の思想を『大英和辭典』における国際音声字母の移入を通して論じている点は大いに評価できるが、以下にみられるように、英語学の観点からのアプローチであり、アルタイ諸語と音声学との関連性については詳らかにしていない。おそらく、井田（1966）は、モンゴル語の文字とは、モンゴル語文語文献のウイグル式モンゴル文字ではなく、現代モンゴル語のキリル文字を想起していたと考えられるのである。

博士の遺稿には満州語に関するもの、蒙古語に関するもの、土耳古（トルコ）語に関するものその他が在るが、ここでは、言語・音声学に関するものを若干挙げてみよう。

2.3　藤岡勝二と上田萬年の思想上の相違点―音声に対する見方を巡って―

本節では、藤岡勝二と師の上田萬年の音声に対する認識の相違点について考察したい。2.2において藤岡のローマ字の辞典を掲げたが、上田萬年も、大正４（1915）年に、冨山房から『ローマ字びき國語辭典』を刊行している。藤岡は、「棒引仮名遣」（長音符号ー）を『言語學雑誌』の「論説」の中でも使用しているが、上田も、研究を始めた初期の頃は、音声中心主義の観点から、表音主義者であった。当初、上田は、『おほかみ』（吉川半七、1889）において「棒引仮名遣」を多用しており、この点からも徹底した表音主義者であったことを窺うことができる。しかしながら、後に、表音主義にかなり慎重な姿勢をとるようになった。明治41（1908）年に、５回にわたって開催された臨時仮名遣調査委員会では、同じく表音主義者の大槻文彦と

ともに、森林太郎との激しい論争に臨んでいるが、森との論争に敗れ、歴史的仮名遣が堅持されることになる。本委員会が開催される以前に、文部大臣官房図書課に調査を託され、藤岡は、「棒引仮名遣」に関するあまたの識者の意見を集約している。この成果は、明治39（1906）年に、時の文部省が、『明治三十八年二月假名遣改定案ニ對スル輿論調査報告』として刊行している。報告書では、国語国字問題に関わった人物59名を選出して、その代表的な雑誌（『太陽』、『國学院雑誌』、『日本』等がみられる）を掲げ、該当する研究者が、次の内、どれに分類できるのか調査しているのである。拙著（2013：79-84）では、藤岡が、研究者の考え方を、（い）から（に）に詳細に分類していることを指摘した。分類の仕方は、（い）「大體賛成」、（ろ）「主義賛成、修正ヲ要ス、尚研究スベシ」、（は）「反對」、（に）「不問ニセヨ」としている。この内、賛成33名、反対25名、不問１名であったが、特筆すべき事項は、上田が、この頃、（ろ）「主義賛成、修正ヲ要ス、尚研究スベシ」に分類されていたことである[1)]。終生、音声中心主義思想を有した藤岡にとって、当時の上田の表音主義の思想は、少し物足りなく感じられたのかもしれない。

上述してきたように、上田と藤岡との間では、音声中心主義の思想の点で、意見の相違はみられるものの、両者ともに表音主義、ローマ字化国語国字運動に賛同していたことに変わりはなかった。とりわけ、先にドイツ、フランスに留学した上田は、明治26（1894）年６月に帰朝したが、翌年の７月に、藤岡は、東京帝国大学文科大学博言学科に入学している。上田は、第三高等学校出身であり、語学の才を有した若き22歳の青年藤岡勝二を高く評価したことだろう。藤岡は、入学した翌年の明治28（1896）年７月に、早くも東京帝国大学の特待生に選定されている。そして、その後、上田萬年は、ドイツ留学から帰朝した藤岡勝二に、自らが担当していた東京帝国大学文科大学言語学科を託するのである。一方、藤岡の留学期間中に、彼とともに言語学会の創設、学会の機関誌『言語學雑誌』の創刊に尽力したのが、藤岡の博言学科の後輩になる新村出（1876-1967）であった。爾来、25年余、藤岡は唯一人で、当時の言語学界の中枢ともいえる東京帝国大学文科大学言語学科を支え、数多くの後進の育成に尽瘁したのであった。当時、東京帝国大学文科大学助教授の職にあった新村は、藤岡が海外留学から帰朝した後、京都帝国大学に異動して、関西の地において、新しき言語学を誕生させ、数々の言語学の俊英を育成したのである。上田は、このように、藤岡の言語学の卓越した才能を見抜き、当時、日本語と最も類縁性があるとみなされたウラル・アルタイ諸語の重要な研究を任せたのであった。

３．藤岡勝二の日本語系統論に関わる思想―比較言語学から類型論的アプローチへ

3.1　上田萬年の目指した言語学とは―藤岡勝二の言語思想の影響について―

本節では、上田が、ドイツ、フランス留学から持ち帰った言語学と彼が当時目指した言語学の役割について考察しておきたい。さらに、上田の言語思想が、藤岡勝二にどのような影響を

及ぼしたのか、検討したい。

上田にとって、言語学を学ぶ主眼は、比較言語学の観点から、日本語の系統論を解明することにあった。そのために、弟子たちには、日本語と系統関係の可能性のある諸言語を学ばせたのである。例えば、金田一京助（1882-1971）は、後に、アイヌ語の大家になったが、それより以前に、『広辞林』の編者として知られた金澤庄三郎（1872-1967）、地質学者神保小虎（1867-1924）のような優秀な学者がアイヌ語研究を進めていた。しかしながら、いずれも研究を断念したため、偶然に彼にアイヌ語研究が託されたのである[2)]。藤岡とともに、言語学会の創設に尽力した八杉貞利（1876-1966）も、当初はアイヌ語研究を目指していた。八杉は、言語学会の創設に奔走していたが、偶然にもロシア留学の機会を得て、後にロシア語学の泰斗となった。若き頃は、『言語學雑誌』第1巻第6号の「雑錄」に「アイヌ語斷片」を寄稿して、アイヌ語研究の第一人者ジョン・バチェラー（1854-1944）の思想的影響をうけ、アイヌ語研究に大変な関心を抱いていた。なお、ジョン・バチェラーは、ローマ字化国語国字運動に賛同しており、「ローマ字ひろめ會」の機関誌『RÔMAJI』にも、数多くの論考を寄稿している。このように、上田は、当時、比較言語学的観点から、音韻対応の一致を通して祖語を再建することによって、最終的に、日本語系統論を解明することを目指していた。自らは文部省内の職務が多忙であり、上述した理由から、弟子たちに色々な諸言語を学ばせたのである。後藤朝太郎（1881-1945）は中国語、上記の金澤庄三郎は朝鮮語、伊波普猷（1876-1947）には琉球語等、上田の弟子たちは、日本語系統論を解明するために、担当した言語を学んだのである。

また、八杉（1900：83-107）は、当時の『言語學雑誌』創刊号の「史傳」に「『フランツ・ボップ』の生涯及學説」を寄稿している。この頃すでに、八杉が比較言語学者として知られたフランツ・ボップの生涯とその学説について執筆していることから、当時の東京帝国大学文科大学博言学科の学生たちが、未だ輪郭が定まらない「言語学」という研究分野を、「博言学」から脱し、新しき学問分野として構築する途上であったことが分かる。そして、当時の比較言語学の研究水準は、現代言語学からみても、かなり難解な言語理論を熟知していたとみなすことができるのである。勿論、比較言語学的観点からアプローチを試みて、音韻対応の一致の法則から、内的再構を試みたような精緻な研究までは到達できなかった。しかしながら、上田が育てた当時の東京帝国大学文科大学博言学科の学生たちは、すでに相当な言語学の知識を有していたことを窺うことができる。ここで注視したい学者として、ゲオルク・フォン・デア・ガーベレンツを挙げておきたい。一般言語学だけではなく、中国の本格的な文法書、すなわち、『中国語文法』（*Chinesische Grammatik,* 1881）を刊行したことで知られており、アルタイ諸語に属するモンゴル語、日本語にも精通していた。上田は、ドイツ、フランス留学において、直にガーベレンツの理論を学んでおり、帰朝後は、上田を通して、藤岡勝二が、当時の最高水準の言語研究やガーベレンツの思想を学んだことが想起できるのである。また、父ハンス・コーノ

ン・フォン・デア・ガーベレンツ（1807-1874）も、政治家でありながら、言語学に関心を抱き、特に満州語の研究者として知られている。ガーベレンツは、中国語文法の研究者、父は満州語の研究者であり、当時の藤岡はアルタイ諸語文献研究を射程としていたが、特に満州語文語文献の研究はかなり早い段階から着手していたと考えられる。

なお、満州語の元々の文字の潮流は以下の如くであり、少しずつ変化を遂げながら継承された。特筆すべきことは、モンゴル文語、古代ウイグル語、ソグド語は、いずれも仏典資料が膨大に残されていることであり、仏教弘通によって、文字も伝来されていったと考えられる。

アラム文字 → ソグド文字 → ウイグル式文字 → モンゴル文字 → 満州文字

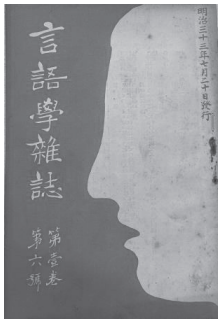
図１　満州文字に至るまでの文字の借用経路

満州文字は、前述したウイグル式モンゴル文字の有声・無声の対立を明確にするために、有圏点、無圏点を打つことによって、この問題を解決しようとしたが、藤岡の遺稿として、後に刊行される『満文老檔』（藤岡勝二訳、小倉進平編、岩波書店、1939）も、藤岡自身が、ローマ字転写（transcription）をした後、現代語訳を試みており、稀代の言語学者藤岡でさえも、どの文字もローマ字転写をしなければ、翻訳はできなかったのである。

3.2　藤岡勝二の比較言語学の理解と青年文法学派について

本節では、なぜ、藤岡が、比較言語学的観点から、日本語とアルタイ諸語の系統関係の研究を進めなかったのか、その理由について考察したい。

文字は、確かに音声を残すのに便利ではあるが、文献そのものの文字が、必ずしも忠実に音声を表すとは捉えなかったのであろう。藤岡の言語、とりわけ文字に対する考えは、「文字はオトの影にすぎない」という言葉に集約できる。藤岡（1900：150-160）は『言語學雜誌』第１巻第２号に「發音をたゞすこと」を寄稿した後、翌年に、同雑誌の第２巻第４号（1901：354-372）に、音声中心主義思想を窺うことができる「言文一致論」等の論文を寄稿している。



『言語學雜誌』第一巻第六号の表紙

勿論、文字は重要であり、藤岡自身も、アルタイ諸語のローマ字転写によって、色々な文献の翻訳をしている。藤岡は、アルタイ諸語文献の研究を通して、音を正確に表記するためには、一旦、音素文字であるローマ字に転写する必要性を強く感じたことが容易に推測できる。藤岡は、アルタイ諸語文献の研究によって、ローマ字の重要性に気づき、ローマ字化国語国字運動に傾倒していき、音声中心主義の思想を形成したと考えることができる。ここにおいて、藤岡の音声中心主義思想とアルタイ学との接点を見出すことができるのである。

なお、筆者にとって初めての学術論文は、「モンゴル仏典における古代ウイグル語の影響について」(『日本モンゴル学会紀要』、1990) であり、モンゴル仏典を詳細に研究した論考であった。上掲の論文において、モンゴル仏典が従来、チベット語の逐語訳であるとみなされてきたが、実は、古代ウイグル語の影響を色濃く反映していることを論じた。この場合も、筆者は、数々の仏典資料を用いたが、モンゴル文語も、古代ウイグル語も、以下のような借用経路をとっていることが分かった。さらに、詳細な説明をすれば、サンスクリット語と古代ウイグル語の間には、トカラ語が入るが、煩雑な説明になり、本稿の主たる目的ではないため、本節での詳細な考察は省くことにしたい。この場合も、借用語彙の経路を、ローマ字転写以外では表すことはできない。以下では、「曼荼羅」の借用経路を掲げることにした。

なお、語彙が「無生物」の場合に、古代ウイグル語の語彙の末母音 a が消失するため、mandal に変化して、その語彙が、モンゴル語に借用されている。一方、日本語では、漢訳仏典から借用されているため、「曼荼羅（まんだら)」と発音されている。

mandala(skt.) ＞ mandal(uig.) ＞ mandal(mong.)「曼荼羅（まんだら)」

skt. サンスクリット語　uig. 古代ウイグル語　mong. モンゴル文語

図２　「曼荼羅（まんだら)」の借用語彙の経路

筆者は、日本語系統論が解明できない理由を次のように考えている。印欧語族のように紀元前2000年頃まで遡及できる文献に比べ、『記紀万葉』は、大部とはいえ、たかだか８世紀頃の資料である。また、当時は、その音価さえ明らかではなく、母音調和の研究も、藤岡の直弟子の有坂秀世（1908-1952)、池上禎造（1911-2005)、橋本進吉（1882-1945）の研究をまたねばならなかったのである。このような事情から、藤岡は、比較言語学的手法とは別の類型論的アプローチによる、日本語とウラル・アルタイ諸語の共通項を見出そうとしたのである。

藤岡勝二の比較言語学の理解について、神山（2006：268-269）は、付節として、「日本における印欧比較言語学の系譜」と題して、当時の数多の言語学者を掲げ、藤岡勝二について以下のように述べている。特に、藤岡が、ジョセフ・ヴァンドリエス（1875-1960）の翻訳以外に印欧語族関連の業績を残していないことについて指摘しているが、この点については、疑義を

呈したい。

上田が帰朝した94年に博言学科に入学した藤岡勝二は、卒業後、日本語のローマ字化の検討や教科書編纂において上田を補佐する役割を重用されることになり、官命によって最新の言語学の成果を吸収すべく、1901年末からドイツ留学へと赴いた[3)]。留学先のライプツィヒから上田に送った私信（藤岡1902）を見ると、彼が当時爆発的流行であったヴント（Willhelm Max Wundt 1832-1930）の心理言語学に傾倒し、また日本語への関心を深めていることがわかるが、青年文法学派の中心的人物ブルークマンの講義を聴講しながらも、印欧語比較言語学に特に関心を示していない。1905年早春に帰朝すると、同年夏に国語学講座に転じた上田の後を受けて言語学講座の担任となった。彼の業績は日本語に関係するものがほとんどだが、モンゴル語研究の先鞭をつけて日本語もアルタイ語に帰属させる説を唱えたことが知られている。藤岡の残した遺稿は恐らく公刊されたものよりもはるかに多い。満州語をはじめとして、モンゴル語、トルコ語、中国語、そして、ゴート語に関する研究や著書の原稿、講義録に混じって、パウル、ホイットニー、ソシュール、メイエ、ヴァンドリエスなど計10点の訳稿が含まれており、特に晩年には印欧語比較言語学の勉強を密に進めたようである。これら遺稿の中で刊行されたのは、ヴァンドリエス『言語學概論：言語研究と歴史』（刀江書院、1938）だけである。

神山（2006）は、自著において、当時の日本における言語学者、とりわけ東京帝国大学文科大学教授を一人で務めた藤岡勝二、京都帝国大学教授として言語学の礎を築いた新村出とその弟子たちの人物像を描きだしている。日本における黎明期の言語学者の人物像とその実態を知る上で、頗る重要な論著といえる。しかしながら、神山（2006）は、藤岡が、カール・ブルークマンの講義を受けながら関心を示していないと指摘しているが、実は、藤岡は、ブルークマンをはじめとする青年文法学派に対して十分な理解を示していたのである。なお、藤岡（1907）は、著書名に「國語」という名称を使用しているため、「国語学」の研究法と誤解される場合があるが、「国語学」に関わる内容は一切なく、「言語学概論」というべき著書であり、数多くの言語学者、特に青年文法学派の言語学者を取り上げている。

当時の藤岡勝二の比較言語学に関する理解であるが、『言語學雑誌』創刊号の「史傳」では、八杉貞利（1900：83-107）が「『フランツ、ボップ』の生涯及學説」という論文を寄稿している。さらに『言語學雑誌』第１巻第２号では、新村出（1900：215-234）が「ヤコブ、グリム（上）」をはじめ、何度もヤーコプ・グリム（1785-1863）の学説について論じている。このように『言語學雑誌』には、比較言語学を代表するグリム、ボップが取り上げられており、藤岡も編集人として、これらの論考を読んでいたのである。なお、上記のブルークマンであるが、藤岡（1907）

は、「一語とは如何。ブルグマンの説。」と上段に掲げ、本文では次のように論じている。下線部は、後で藤岡が施したものであるが、当時、藤岡は、カール・ブルークマンの言語思想に深く関心を抱いていたのである。

しかしその前は一語とは如何なるものかと云ふことをきめねばならぬ。ブルグマンは、通常語詞と称するものも、其意義甚不完全であって、語結合に依て成る文といふこと丶は立派な區別の立ちがたいものがある。(1907：79)

他にも、藤岡（1907）では、次のような言語学者の言説がみられる。ここでは、音声学者のヘンリ・スウィート、デンマークの言語学者オットー・イェスペルセン（1860-1943)、インド・ゲルマン（当時の名称はゼルマン）語族という名称、さらには、サンスクリット学のオットー・フォン・ベートリンク（1815-1904）を挙げている。なお、ベートリンクは、現代言語学ではチュルク諸語に属するヤクート語に関心を示し、語法に関する著書を残したことで知られている。ここでも、藤岡（1907）の言語学者の表記に従うことにする。

……スウヰート氏（Sweet）がかういふことを云ってゐる。(1907：43)

印度日耳曼語族は、……（1907：66）

次いで丁抹の言語學者エスペルゼンは、……（1907：75）

ボェートリンクはヤクート（Jakut）といって西比利亞のレナ（Lena）河の附近にあるウラルアルタイ語中土耳古其韃靼系に属する言語系の語法書をかいた（1851)。(1907：91)

また、これまで、たびたび掲出したガーベレンツの言葉に次のような言説がみられる。ゲオルク・フォン・デア・ガーベレンツの重要な言説であり、藤岡（1907）の音声中心主義思想に多大なる影響を与えた言葉といえる。なお、傍点は、藤岡自身が施したものである。

ガベレンツ（Gabelentz）は吾等の今日の語は遂に昨日の語の通りでないとまで極端に云ったが、さういっても差閊はない。(1907：48)

言語の本質をついた言語変化に関わる思想であり、言語は常に変化する要素を胚胎しているenergeia（エネルゲイア）「動的現象で、常に生成している状態」であり、ergon「静的で、出

来上がったもの」ではないという意味である。この用語は、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（1767-1835）の語であるが、藤岡（1907）の著作でも、フンボルトの名が掲出されている。

ここで注視したいのは、言語が常に変化している要因を包含しているとすれば、比較言語学が拠り所としている文献の文字さえも、実際の音声を必ずしも表しているわけではないことになる。藤岡は、文字はあくまでオトの影に過ぎず、この点が、比較言語学の限界と感じていたのではないだろうか。そして、日本語系統論を解明する方法論を大きく転換して、類型論的アプローチを試みたと考えられるのである。

藤岡は、日本語とウラル・アルタイ諸語の共通項を、1. 語頭に子音が連続することを避ける、2. 語頭に r 音が来ない等をはじめ、14箇条に分類して提示した。一つひとつの項目については、すでに拙著（2017b）でも取り上げたので、ここでは詳細に説明することを控えるが、重要な事項は、藤岡が比較言語学一辺倒の時代において、類型論的アプローチという新しい手法を用いた点である。この方法論によって、日本語系統論が解決したわけではなく、藤岡も、今後も精緻な研究の必要性を指摘している。この点については、拙著（2017b：91-103）を参考にされたい。また、拙著（2017b）に対して、社会言語学の碩学田中克彦（1934-）は次のように述べている。

> 話を藤岡さんが掲げたアルタイ語の一四箇条の特徴にもどそう。柿木君は、それを服部四郎の『日本語の系統』（岩波文庫、一九九二年）から引いて「これほど簡潔にまとめた」ものはないと書いている（九一頁）。しかし、柿木くんが書くべきであったのは、「簡潔なまとめ」ではなく、もっと大切な別のことだったのだ。

筆者は、一橋大学大学院で、アルタイ言語学、社会言語学を研究していた頃、田中克彦ゼミに所属しており、その関係もあり、上述した文章では、柿木君という名で記されている。田中（2021：158）は、拙著（2017b）に対して、浅薄な見方を鋭く指摘している。筆者は、拙著（2017b）で、国語学者大野晋（1919-2008）、服部四郎が、藤岡の学説を高く評価していると論じたが、実際には、服部は、藤岡の類型論的アプローチを否定していたのである。藤岡は、確かに、直弟子服部を言語学研究室の副手として起用したが、服部は、後に、藤岡の日本語系統論に対して批判的だったのである。

4．藤岡勝二のローマ字化国語国字運動について

4.1　藤岡勝二のローマ字化国語国字運動の実践的側面

藤岡のローマ字化運動については、すでに拙稿（2022）でも詳しくふれているので、本節では、

彼が中心になって設立した「ローマ字ひろめ會」で用いたテキストについて考察したい。また、その前に、拙稿（2022）を参考にしながら、少し藤岡勝二のローマ字化国語国字運動の実践的側面についてみておきたい。

時の政府が推進した本格的な事業は、漢字廃止を前提にして、かな文字とローマ字のどちらが日本語に相応しいのか議論することであった。当時は、貴顕紳士を問わず、市井の人々が、日本語にとって理想的な文字とは何かという問題に対して、真剣に論議をした時代であった。現代では想像できないほど、一般大衆の文字に対する拘りがあった。

藤岡勝二は、当初、明治38（1905）年に、日本式ローマ字表記法を支持する派とローマ字を普及する目的で大同団結したが、結果的には、体系性を重視する日本式と音声重視のヘボン式とは相いれることはなかった。後に、日本式ローマ字表記法の支持者たちが去り、新しき会を結成するのであるが、当時は、ヘボン式ローマ字表記法を支持する派が圧倒的に優勢であり、政財界からも認められていたのである。

この頃の国語国字運動は、ローマ字化国語国字運動だけではなく、様々な国語国字運動が積極的に試みられた時代であった。ローマ字化国語国字運動だけが盛んであったわけではなく、仮名文字論、新国字論等も提示されていた。また、国語国字問題の嚆矢であるが、後に駅逓頭に就任する前島来輔（前島密）（1835-1919）が、慶應 2（1866）年に建白した「漢字御廃止之儀」と考えられる。一方、ローマ字化国語国字運動については、南部義籌（1840-1917）の『修國語論』の建白書を先駆けとみなすことができよう。特筆すべき事項は、南部は、元々は漢学者であったが、明治の日本の近代化を意識したためか、明治 5（1872）年に『文字ヲ改換スル義』を文部省に提出していることである。ここでは、特に、ローマ字化国語国字運動の黎明期に注目したい。明治18（1885）年に「羅馬字會」が結成されているが、当時、ローマ字化国語国字運動に尽力した人物として、東京帝国大学文科大学学長外山正一（1848-1900）、東京帝国大学初代植物学科教授矢田部良吉（1851-1899）を挙げることができる。藤岡が本格的なテキストを作成する前に、明治18（1885）年 6 月に、矢田部が、すでにローマ字学習用テキスト『羅馬字早學び』を刊行していた点は特筆しなければならない事項といえよう。

また、ここで特記すべき事項として「羅馬字會」の機関誌『Rōmaji Zassi』が刊行されていたことであり、本雑誌が「ローマ字ひろめ會」の機関誌『RÔMAJI』の原形となったと考えられるのである。

4.2　藤岡勝二が推進したヘボン式ローマ字のテキストについて

藤岡は、物理学、航空学を専門とする日本式の考案者田中舘愛橘とその支持者が去った後、自らローマ字用テキストを刊行する。そして、何度も改訂を試みながら、理想的なローマ字を追究していったのである。

本節では、まず、藤岡の刊行したテキストを考察したい。このテキストこそが、「ローマ字ひろめ會」のバイブルとして使用された『羅馬字手引』（新公論社、1906）である。本書は、標準となるテキストとは思えないほど、ローマ字の語彙の例の中に、口語体や地域方言が数多く収録されている。このテキストからも、藤岡の音声中心主義思想を窺うことができるのである。

なお、本文の語彙は、藤岡（1906：17-50）から引用した。この中の注視すべき語彙のみ取り上げ、語彙、文例、掲載頁数の順に並べ、分かりやすいように、番号を配した。

『羅馬字手引』（新公論社、1906）の表紙

『羅馬字手引』の語彙表

番号	語	文例	頁
①	arō（アロー）	sō de *arō*（ソー　デ　アロー）	17頁
②	＊ba（バ）	sō shinakere*ba* naran （ソー　シナケレバ　ナラン）	18頁
③	cha（チャー）	mi*chā* inai（ミチャー　イナイ）	18頁
④	chū（チュー）	nan*chū* koto（ナンチュー　コト）	19頁
⑤	dake（ダケ）	kakeru *dake* kakō（カケル　ダケ　カコ―）	
⑥	desu（デス）	sō *desu*（ソー　デス）	21頁
⑦	e（エ）	uchi *e* kaeru（ウチ　エ　カエル）	22頁
⑧	kaina（カイナ）	sō *kaina!*（ソー　カイナ）	27頁
⑨	＊mabure（マブレ）	chi*mabure*（チマブレ）	30頁
⑩		hokori*mabure*（ホコリマブレ）	
⑪	mono（モノ）	nanben mo tanomu *mono* da kara （ナンベン　モ　タノム　モノ　ダ　カラ）	33頁
⑫	＊tomo（トモ）	nan*tomo* nai（ナントモ　ナイ）	46頁

なお、上記の表の＊については、次のように記されている。

ことばの分け方は、……＊のしるしのあるものはつづける方のものである。

①の表記は「あろう」であるが、「調音労働の経済性」の観点からみると、連母音が長音化しているため、実際の発音は arō「アロー」になっている。文例の初めの「そう」が sō「ソー」と発音されるのも同様である。⑤の kakō も、通常なら「書こう」と表記される。

このような音声の変化は、母語が日本語である場合、改めて気づくことはできないが、音素文字のローマ字で表すとすぐに理解できる。なお、拙著（2017a：66）でも指摘したが、漢字崇拝、文字崇拝が日本人の心性の底流にあるため、文字は重要視されるが、人は、音声に対しては無頓着なのである。本節では、好個の例として、元号を挙げることにしたい。例えば、明治「めいじ」、大正「たいしょう」、昭和「しょうわ」、平成「へいせい」、令和「れいわ」と元号が続いているが、いずれも文字通りではなく、「メージ」、「タイショー」、「ショーワ」、「ヘーセー」と発音しているはずである。令和「れいわ」という元号は、万葉集と関わりを有しているといわれているが、この元号も「レーワ」と発音している。漢字という文字表記がプレステージ「威信」を有しており、実際の音声をいかに重要視していないかを窺うことができる。こうした例は、日本語を母語としている人ほど意識できない。日本が真のグローバル化を目指すのであれば、日本社会にとって頗る重要な元号は、外国人にも分かりやすい音声について考慮すべきであろう。

③、④、⑧は、日常会話に近い口語体を重視したため、実際の発音で表記されている。⑨と⑩は、現代語なら「血（ち）まみれ」、「埃（ほこり）まみれ」と表記すべきであるが、本表記は、明治期の小説にも使用されている。m（両唇鼻音）と b（有声両唇破裂音）の調音点が同じであるため、音価が交替すると同時に、後続する母音の交替が生じていると考えられる。このように『羅馬字手引』は、ローマ字化国語国字運動にとって頗る貴重な資料になるが、本稿では、後に刊行される『ローマ字手引』との比較が充分にできなかった。この点については、語彙特徴、語彙数の変化等、藤岡がどの時点で改訂を加えたのか、さらに綿密な考察が必要になると考えられる。本稿では、藤岡の音声中心言語思想が表れた典型的なローマ字のテキストとして『羅馬字手引』を掲げた。今後は、『ローマ字手引』との比較を通して、ローマ字化国語国字運動の研究を主眼としたテーマで、「ローマ字ひろめ會」のテキストに関する稿を改めて論じたい。

上述したように、藤岡は、『羅馬字手引』の改訂を繰り返し、テキストのタイトルも、現代表記の「ローマ字」に代え、大正 4（1915）年に『ローマ字手引』を刊行している。会の実践を支えるテキストを作成した点で、注目すべき事項であると同時に、今日のテキストの感覚からすると、「言文一致論」を象徴したような、藤岡の音声中心主義思想を色濃く反映した独特なテキストになっている。とりわけ、日常会話の口語的表現、地域方言を導入しているわけであるから、「ローマ字ひろめ會」認定の統一テキストとしては、決して使用しやすいものとはいえなかったであろう。かくほどまでに、藤岡が、自らの音声中心主義思想を徹底していたことを窺えるのである。勿論、実際のローマ字の教授法で用いる際には、個々の教員が各地方

で用いられる地域方言や口語体に変更していたと考えられる。しかしながら、藤岡は、そのようなことは重々承知の上で、上掲したテキストを作成したのである。また、「ローマ字ひろめ會」の理論と実践の精神的支柱であった藤岡勝二が作成したテキストであるため、本会の機関誌『RÔMAJI』において、会に最も相応しいテキストとして喧伝されている。なお、関西地方の方言を導入しているのは、藤岡の故郷が京都市であり、第三高等学校を卒業した後、22歳で東京帝国大学文科大学博言学科に入学するまで、関西の地を拠点に活動をしていたことと無縁ではない。故郷の言葉、実際の音声を大切にしたために、あえてテキストにローマ字表記の口語体や地域方言を取り入れた点は、瞠目すべき事項であるといえよう。

最後に、本文では当時の時代的背景を考慮したため、旧字体のままにした箇所があることを付記しておきたい。筆者自身は、当時の人々の文字に対する認識を理解するためには、文字もできる限り、改変することなく表記すべきであると考えている。こうした点から原文を尊重することにした。

5．おわりに

本稿では、言語学者藤岡勝二の音声中心主義思想とその淵源を、彼のアルタイ諸語研究とローマ字化国語国字運動の理論を考察することによって、明らかにした。藤岡は、アルタイ諸語文献を訳す際に、必ずローマ字転写をしてから、翻訳をした。藤岡が逝去した後、膨大な満州語やモンゴル語のアルタイ諸語文献が残されたが、藤岡は、大部の資料をローマ字転写（transcription）しながら、翻訳を試みていたのである。おそらく、縦文字の満州文字やウイグル式モンゴル文字の難解な文献を翻訳するときに、元々がローマ字であれば、いかに簡単な翻訳になるかを感じとっていたことであろう。

一方で、藤岡は、ヘボン式ローマ字表記法を支持しており、当時の政府よりローマ字に関わる委員を託され、明治38（1905）年に、田中舘愛橘と「ローマ字ひろめ會」を結成している。後に、日本式派は脱退するが、藤岡は、一貫してローマ字化国語国字運動を続け、理論面を支えるテキストとして、「ローマ字ひろめ會」のバイブルといえる『羅馬字手引』を刊行している。4.2では、本テキストの言語特徴を考察したが、「ローマ字ひろめ會」の標準となるテキストとは思えないほど、口語表現が数多く含まれている。このように言語学者の藤岡勝二は、終生音声中心主義思想を貫くが、その淵源となったのは、アルタイ諸語の文献研究があったと考えられるのである。

さらに、本文では詳しく論じなかったが、藤岡は教西寺で、父藤岡法雲の長男として生まれている。幼き頃より博覧強記で語学の才を有していたため、第三高等学校を卒業した後、学問の道を志すことになる。特に、柳父（2012）が指摘した「カセット効果」を有する経典を聴き

ながら育ったためか、なぜ人は、意味が分からない、否、意味が分からないからこそ、そこに大切な何か有難いものが込められていると感じるのか、この理由について熟考したことであろう。漢字の渦を有した経典の視覚的イメージ、読経による聴覚的な効果等、経典の有難さは分かっても、なぜ人々を魅了させるのか、不思議に感じたことであろう。幼少より、数多くの言語に精通していた藤岡は、いち早く経典の言葉とは、元々は古代インドの言語、サンスクリット語であることを知る。そして、経典に深奥な意味が含まれていることを学んだ後、サンスクリット語と比較言語学とは関係性が深く、インド・ヨーロッパ語族のインドとはまさにサンスクリット語を指す用語であったことを理解するのである。

こうした幼少期が、藤岡を音声中心主義思想へと慫慂したのである。

注

1）不問にしたのは、作家、帝国学士院会員、文化勲章受章者の幸田露伴（成行）（1867-1947）である。

2）神保小虎の実弟は、音声学者神保格（1883-1965）であり、藤岡のローマ字化国語国字運動を支え、「ローマ字ひろめ會」でも、重要な役割を果している。

3）神山（2006）では、藤岡の生没年を明記した後、写真が掲げられているが、ここでは省いたことを明記しておきたい。

引用文献

井田好治（1996）「国際音声記号（IPA）の移入と藤岡勝二著『大英和辞典』第一巻（大倉書店大正10年刊）―英学史的再検討―」『英学史研究』第29号　pp.13-29

柿木重宜（1990）「モンゴル仏典における古代ウイグル語の影響について」『日本モンゴル学会紀要』第21号　pp.1-12

柿木重宜（2013）『近代「国語」の成立における藤岡勝二の果した役割について』ナカニシヤ出版

柿木重宜（2017a）『日本語学トレーニング100題』ナカニシヤ出版

柿木重宜（2017b）『日本における近代「言語学」成立事情Ⅰ―藤岡勝二の言語思想を中心にして―』ナカニシヤ出版

柿木重宜（2018）『新・ふしぎな言葉の学』ナカニシヤ出版

柿木重宜（2022）「社会言語学的観点からみたローマ字化国語国字運動：「ローマ字ひろめ会」の実態を巡って」『関西外国語大学研究論集』第115号　pp.33-50

神山孝夫（2006）『印欧祖語の母音組織―研究史要説と試論―』大学教育出版

言語学会（1900-1902）『言語學雑誌』冨山房

田中克彦（2021）『ことばは国家を超える―日本語、ウラル・アルタイ語、ツラン主義―』岩波新書
服部四郎（1999）『日本語の系統』岩波文庫
藤岡勝二（1906）『羅馬字手引』新公論社
藤岡勝二（1907）『國語研究法』三省堂書店
藤岡勝二（1915）『ローマ字手引』ローマ字ひろめ會
文部大臣官房圖書課（1906）『明治三十八年二月假名遣改定案ニ對スル輿論調査報告』文部省
八杉貞利（1900）「『フランツ・ボップ』の生涯及學説」『言語學雑誌』創刊号　pp.83-107
柳父章（2012）「日本における翻訳造語―「カセット効果」について―」『東アジアにおける近代諸概念の成立―近代東亜諸概念的成立―』第26巻　国際日本文化研究センター　pp.121-125
ローマ字ひろめ會（1927-1942）『RÔMAJI』新公論社

（かきぎ・しげたか　外国語学部教授）